
転生者のハンターライフ【習作】

ままDoLL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者のハンターライフ【習作】

【Nコード】

N5351Z

【作者名】

ままDOLL

【あらすじ】

滑って転んであら不思議。

これはHUNTER×HUNTERの世界へと転生してしまった一人の男の物語。

プロローグ

Web小説。

なかでも二次小説とよばれる物でよく扱われるジャンルに、転生モノというジャンルがある。

まあ、知っている人は知っているし、知らない人は全く知らない。多分そんなものだ。

「うばー！あばばばー！！」

世間一般で言うオタクそのものであり、アニメ・漫画の原作だけでは飽きたらず、ネット上で二次小説を山ほど漁って読んでいた俺にとってはなじみ深いもの。

転生。

「あぶぶー………」

俺にとって、転生とはまさに夢。

子供の頃あぁしておけば…、あの時こうしておけば…なんて後悔は、腐るほどある。

もう一度生まれ変わって、全てをやり直したい。

あわよくば、こんな現実には捨てて、漫画やアニメなどのファンタジーな世界で、おもしろおかしく生きてみたい。

そんな後悔や妄想が腐って、発酵して、得体の知れないネバネバとしたナニかを体から噴出しまくっているのが、俺だ。

「うぶぶぶ……」

いや、俺『だった』。

「うばばー!!」

何故俺がこんなこんな思考をしているのかというところ…。まあネット上の諸兄ならば、もう察しが付いているだろう。

どうやら、俺は転生してしまったらしいのだ。

わーいやったね。

アパートの階段から降りようとして、足を滑らせて…そのままお陀仏。

コンクリートに打ち付けた頭から何やら、どろっとした脳味噌的

なモノが流れ出たのを感じたと思ったら、何かを考える前にそのまま意識を失って、気が付けば。

「うぶう……」

赤ちゃんに生まれ変わっていた。

まあ痛いやら怖いやら感じる前に死ぬことができたっぽいのはラッキーだったと、今考えればそう思う。

痛いの嫌だし。

生まれ変わったといっても、自分の体が赤ちゃんになっていると気が付いたのが、ついさっき。

余りに理解不能な状況に混乱したり、半端じゃないほどの体の違和感に戸惑ったりしたが。

とにかく今は。

「あぶぶぶあー！ー！！うばー！！」

この状況を何とかして貰うのが先だ。

元気に声を上げる赤ん坊の俺を、笑顔で見詰める両親？そんなものはどこにも居ません。

気が付いたときには巨大な門のような木製の和風な扉の前で、絶賛『放置中』。

毛布に包まれてカゴのような物の中に寝かされている俺の目の前にある空からは、しんと音もなく降り続ける雪。

……捨て子ですね。分かります。

「……。」

ってアホか！？死ぬ！死んでしまう！

「あぶううあああー！ー！」

転生した瞬間捨て子でしかも死の危険とか、どんだけですかー！？

誰か助けて！助けて下さい！

「うぶぶあー！！」

誰かに気付いて貰おうと叫び続けるが……。

「あぶ……！ぶう……」

眠くなってきました。はい。オワタ。

この動けもせず、数分で眠くなる赤ん坊の体が憎い……。

寒くて体は勝手に震えるし……『ダメだ！寝たら死ぬぞ！』をこんな形で経験することになろうとは……。

こんな転生ならしない方がまだマシだったな……。

「あぶうあ…」

あ、もう……

「……。」

だめっばい……

「Z
Z
Z
…」

第1話

俺はラスク。この世界に生まれて今年で3歳になった。

そう。俺は転生していきなり捨て子スタートという試練を乗り越えた、あの赤ん坊である。

結論から言えば、俺は助かった。

寝てしまった後しばらくして、運良く拾って貰えたのだ。

聞けば、俺は数日生死の境目を彷徨ったようで……。

毛布にくるまれていたとはいえ、あんな雪の寒空の中に数時間放置されていたので当たり前なのだが。

拾われた時にはもう殆ど死んでいるような状態で、何とか一命を取り留めたという。

そのとき俺を救ってくれたモノというのが……。

まあ、そのことについてはまた後で。

俺も今年で精神年齢28歳。まあ何とか元気でやっています。

そんな俺の目の前で今、一つの戦いが繰り広げられている。

「ふんッ！はッ！どりゃー！ー！ー！」

「ほっ！よっ！ととと。———フォッフォッフォ。まだまだじやのう」

「押忍ッ！！てりゃー！ー！」

広い道場。そしてその広い道場の中にひしめき合う肉、肉、肉。

むさ苦しい溢れんばかりの筋肉達に囲まれて、一人の老人と男性が戦っている。

実際は戦っているというより、老人は遊んでいるといった感じで全力で殴りかかっている男を軽くいなしているのだが。

「フォッフォ」

男が繰り出す拳の連撃を笑いながらかわし続ける老人。

「そろそろ終わりにするぞい」

「押忍！！」

「ふん！」

ドガァン！！

老人の一突き。

まるで力を入れているように感じられないその右拳の一撃で、男は吹き飛び壁に叩き付けられた。

老人が、自分よりも二回りも大きい筋肉質の男を吹き飛ばすというこの光景。

転生する前の俺ならば驚いたかも知れないが、もう何度も目の当たりにして、流石に慣れてしまった。

「これからも精進することじゃな」

「ぐっ…っ…。お、押忍…有難う、御座い…ました…」

「今日はここまでかのう？——おい、ラスク！そろそろ帰るぞい！」

「はい」

こっちに向かって歩いてくる老人はあれだけ動き回っていたのに、関わらず、汗一つかいていない。

高齢による肉体の衰えなど全く感じさせないこの老人こそが、捨て子だった俺を拾ってくれた命の恩人。

名をネテロという。

そう。俺が転生した世界。それはHUNTER×HUNTERの世界だったのだ！

何度も読んだあの有名な漫画。アニメにもなったあの世界に転生したのだ！

死にかけていた俺を救ったのが、念。

あの雪の日。

死にかけている俺を見つけたネテロが、ハンター協会専属の念医師なるものをすぐに呼んでくれたおかげで何とか一命を取り留めたのだ。

『ネテロ』、『ハンター協会』、そして、『念』。

それを知った時、俺は狂喜乱舞した。

魅力的なキャラクター。ハンターという優遇されまくった職業。

それに加えて、念能力！何度自分の念能力を妄想したか分からない。

その魅力的な空想の世界に、今俺は生きているのだ！と。

だが、次の瞬間には絶望した。

どうせならもっと違う世界に生まれたかった、と。

だってそうだろう？

物語の主要な登場人物も、時には何の罪も関係もない通りすがりの一般人まで、ぽんぽん死んでいく。

人の命なんてゴミクズほどの価値もない。

それがHUNTER×HUNTERという世界なのだから。

実際に俺を拾ってくれたネテロも、キメラアントとの戦いで自爆して命を落としたのだ。

原作に登場しない転生者の俺なんて、いつ死ぬのかわかったもんじゃない。

しかし幸いにも、俺はネテロというこの世界屈指の実力者に拾って貰うことが出来た。

一生誰かに守って貰うつもりはない。

そんな他人任せで生きていける程、この世界は甘くない。

自分の身は自分で守らなくてはならない。

せっかくHUNTER×HUNTERの世界に転生したのだから、原作には積極的に介入したい。

そのためには、建ちまくる死亡フラグをぶち折るだけの力が必要になる。

赤ん坊の俺なら、これから幾らでも強くなれる機会があるはずだ。

そう考えて、いくらか気持ちを持ち直したものの、赤ん坊の俺では出来る事に限りがあった。

なんとか情報収集をするのが関の山だった。

そんなこんなで、転生してから既に3年が経過してしまった。

調べが付いたのは今は1985年だということ。

そして、原作開始（ゴンがくじら島から旅立つ年）が1999年。これは漫画を何度も読み返したから憶えていた。

つまり原作開始は14年後。その時に俺は17歳になっている。

14年必死に修行して念能力を会得すれば、最低限ハンター試験

でヒソカに殺されずに済むくらいには強くなれるんじゃないだろうか。

『有難う御座いました!!! 押忍!!!』

心源流の門下生達の汗臭いお見送りの言葉を背に、俺とネテロおじいちゃん（そう呼べと言われた）は道場を後にした。

育ての親の“一人”であり、心源流の師範であるネテロおじいちゃんはたまにこうして俺を道場に連れてくるのだ。

流石にまだ3歳なので鍛錬に参加させられるようなことはないが、そろそろこっちからお願いしようかな〜と思っている。

孫煩惱のネテロおじいちゃんは俺が心源流を習いたいと思っていると知れば喜ぶだろうし。

育ての親の“一人”というには訳がある。

ネテロおじいちゃんは俺を実の孫のように可愛がってくれているが、流石にハンター協会の会長でもある彼は忙しいらしく、たびた

び世界中を飛び回っていた。

つい最近まで乳児だった俺は、当然誰かに面倒を見て貰わなければならなかったので、そう言う場合は人に預けられた。

その時その時で預ける人が違うため、俺の育ての親（自称）はどんどん増えていっている。

そして、

「おいコラ！クソジジイ！！『あたしのラスク』をあんな汗臭い道場に連れて行くなって何度言ったら分かるのかしら！？」

道場から出て少し歩いた所でいきなり現れ、ネテロおじいちゃんに罵声を浴びせる少女。

俺の育ての親の一人。

「あ、ビスケだ〜！」

「久しぶりね〜ラスク！」

俺が少女に駆け寄ると、彼女は自分のお腹あたりまでしかない俺の頭に手を載せて、ぐりぐりと撫でてくれた。

久しぶりって言っても、つい3日前まで一緒にいたんだけど…。

彼女の名前はビスケット＝クルーガー。

あのゴンとキルアも師事した、作品きつての美少女(?)である
ビスケも俺を可愛がってくれているのだ。

何というラッキーボーイ。

「ほっほっほ！——なあゝにが『あたしのラスク』じゃたわけ
！！寒空の中、道場の門に捨てられておったラスクを拾ったのは儂
じゃ！」

「ふん！いつまで経っても名前の一つ決められないクソジジイの
代わりに、その『ラスク』という名前を付けてあげたのは一体誰だ
とおもっているわけ！？そもそもジジイは拾ったっていうだけで、
その後ラスクを此処まで育てたのはあたしでしょうが！」

「儂の名前から取って『テロル』という名前に一度決めたじゃろ
うが！」

「それじゃあラスクがテロリストみたいじゃないのよさ！」

「おーい……」

俺の声など聞こえないのか、ぎゃーぎゃーと言い争う2人。

目の前で繰り広げられる見慣れた口げんかに、俺はため息をつい

た。

俺を捨てた人間は、どうやら名前を付けるといふことさえ放棄したようで、俺を包んでいた毛布と籠以外は何の手がかりもなかったらしい。

国際人民データ機構にもデータが無かったと言うから、俺の両親は犯罪者か、もしくは流星街の住民か…。

まあ、顔も知らない両親とおぼしき人間のことなんて、米粒ほどの興味もない。

むしろ、捨ててくれて感謝しているぐらいだ。

今はこうして幸せに生きているのだから。

とにかく、名前も何もなかった筈の俺の、この『ラスク』という名前は、ビスケが言っていたとおり彼女が付けてくれた物だ。

ビスケと出会ったのはまだ0歳だった頃。

俺が一命を取り留めて間もない頃、たまたまビスケがネテロおじいちゃんを訪ねてきたときに出会った。

赤ん坊の世話などしたことがないネテロおじいちゃんが、ただオロオロと困惑している様子を見るに見かねて、実際に俺を此処まで育ててくれたのは殆どビスケだ。

原作を読んだだけでは分からないビスケの隠された一面。

やはりビスケも一人の女性だったということか。

国際人民データ機構への国民番号の登録や生態データの登録等も、彼女が全てやってくれた。

母乳……ではなく、市販のミルクを与えてくれたのも、おしめをかえてくれたのも全部ビスケ。

それはもう甲斐甲斐しく世話してくれた。

その甲斐あって？ビスケは特別俺を可愛がる。

原作14年前なので、ビスケは既に大体40歳をすぎた位なのだが……。

既に念能力である魔法美容師まじかるエステを開発済みなのか、筋肉質の大女ではなく、可愛い少女の容姿をしている。

まあ、見た目はどうでも良いんだけどね。

ビスケは原作の中じゃかなり好きなキャラクターだったし。

こんな美少女に育てて貰えた俺は、かなりの幸せ者だろう。

とにかく、こうして2人が俺を巡って口げんかする（ときにはマジの殴り合いに発展する）のはいつものことなのだが、本人を目の前にして「捨てられていた」だとか「テロリスト」だとか大声で騒がないで欲しい……。

「「「……」」」

ああ……通行人の視線が痛い……。

「ラスク!!」

「わっ!」

口げんかが終わったのか、ビスケはもの凄い勢いで俺に抱きつく
と、俺の頭のとっぺんに柔らかい頬を当てて、スリスリとほおずり
してきた。

「ん……ラスク……!……クンクン。よかった!汗臭くないわ!
今日もラスクは良い匂いだわさ♪」

「う……。くすぐりたいよビスケ」

「あ……!も……!なんであんたはこんなに可愛いのかし
ら……!」

ビスケはそう言うと、体全体で力一杯俺を抱きしめた。

自分で言うのもアレだが、実際俺は幼い子供特有のかなり可愛らしい容姿をしている。

ふわふわと柔らかい金髪に、くりつとした大きな緑色の瞳。

幼いながらも整いまくった顔立ちは、将来は結構なイケメンになるだろうこと間違いなし。

前世ではとても口では言い表せないほどのキモメンだったので…、多分その反動なんじゃないかと勝手に思っている。

って…力一杯？

ギュウウウウウウウッ！

「うぐっ……………！？び、び、す…………け…………」

「（スリスリ）」

「ぐるじ、いいい！……………は、はなじ……………で……………」

「（スリスリスリスリ！）」

助けを求めるようにネテロおじいちゃんの方に視線を向けるが、
どうやら口ではビスケに敵わなかったらしく（町中でおっぱじめる
訳にもいかず）、道ばたにしゃがみこんで凹んでいる。

あ、豆の人ことネテロおじいちゃんの秘書のビーンズさんが来た。
なんだろう。

またネテロおじいちゃんに仕事かな？

あゝあ、連れて行かれちゃった……。

「び、びずげ……もう……ダメ……」

「（スリスリスリスリスリスリスリスリスリスリ！！）」

「……ぶくぶくぶく」

俺はラスク。今年で3（28）歳になる転生者。

HUNTER×HUNTERの世界で、今日も元気に生きていま
す。

「スリスリ……。——うゝん、堪能した！ってラスク！？泡な
んか吹いちゃってどうしちゃったのよさ！？ラスク……！？」

多分……。

第1話（後書き）

これは酷いキャラ崩壊。

第2話

時は1987年。原作開始12年前。

俺は5歳になった。

前の世界だと、たぶん幼稚園の年中とか年長とか、その位かな。

この世界では幼稚園に通っているということではなく、もっぱら通信教育だ。

いろんな人に預けられながらここまで育ってきたので、当然一定の街に留まっている訳じゃないから、それしか選択肢が無いとも言える。

別に不満はない。

むしろそうしてくれとネテロおじいちゃんに頼んだ。

貴重な幼少期を狭い幼稚園で過ごすなんて考えられない。

同世代の子供達とお遊戯したり、ままごとしたり……？無理だ。

あれだけ夢見たファンタジー世界なのだ。

いろんな人に連れられて、世界のいろんな場所を見せて貰う方が何倍も楽しいし、有意義だ。

それに俺には、原作介入という大きな目標があるので、そんなことをしている暇はない。

そういえば、原作で1987年と言えば、グリードアイランドが発売された年だ。

正直言えばかなり欲しかった。

ゲームその物も面白そうだし、後々バッテリー氏がゲーム本体にもの凄い懸賞金をかけたりするし。

それに実際にG・Iを体験してみたいと前世では常々思っていた。しかし当然、5歳児の俺が手に入れられるようなモノでは無かった……。

まずその価格からしてありえない。

58億ジェニー？ しかも現金一括払い！？

アホか！

たしかに、あれだけのゲームを開発するのに幾ら金が掛かったのか想像も付かないが、ゲームソフト1本でそれは高すぎるでしょ？

多分だけど、『その程度の金を稼げないヤツはG・Iをプレイする資格がない』とかそういう意図なのだろう……。

毎年、育ての親たちからお年玉をもらったりして、何とかコツコツ貯めた俺の貯金（既に前世の貯金額を大幅に上回っている）。

それをもってしても……うん、無理！まったく手が届きません。

しかも、100本という出荷台数にもかかわらず、欲しがる人が2万人以上とかどんな競争率だよ……。

物売るっていうレベルじゃねえぞ！？オイ！

ネテロおじいちゃん達のコネで手に入れようと思えば手に入っただろうけど、流石にそこまでのわがままは言えないので諦めた。

更に強くなるためには良い修行場でもあったんだろうけどね。G・I。

残念だけど、まあ仕方ないさ。

原作に突入すれば、プレイする機会はあるからやってくるだろう。多分。

そうそう。

更に強くなるためにと言ったけど、今の俺は同年代の人間に比べたら、かなりイイ線いってるんじゃないかと思う。

残念ながら未だ念は教えて貰っていないけど、その分基礎となる体はかなりのモノになってきた。

まあおれを鍛えてくれる人達全員がチートみたいなもんなので、当然と言えば当然なんだけど。

強くなるための修行は4歳になった時から始めた。

本当ならもうすこし前から始めたかったのだが……。 (それでもしなければあの原作チート組に追いつけそうもない)

過保護すぎる親たちにとめられました、まる。

正直原作のイメージから、むしろ喜んで訓練してくれるような人達ばかりだと思っていたのだが、甘かった。

『つよくなりたい』『はんたーになりたい』『ぼくをきたえてほしい』と、当時3歳の俺が育ての親達に話したとき……。

すぐさまRSS会員全員が招集され、それはもう、信じられないほどの大騒ぎになった。

俺は、会員の溺愛っぷり (中にはそうでもない人も居るけど) をナメていた。

R S S会とは、R、^{ラスクを}S（健やかに）、S（育てるための）会。

俺の預かってくれた人達で構成されている委員会のことだ。

なんのこっちゃ。

俺の知らない間に得体の知れない委員会が、いつのまにか出来ていた。

そうして始まった緊急会議。

誰もが、俺の『つよくなって、はんたーになりたい!』という考えに異論はないらしく、むしろ喜んでくれた。

しかし、ネテロおじいちゃんを筆頭とした『大歓迎じゃ!今すぐ始めるとするか?』派。

そして、ビスケを筆頭とした『まだラスクには早すぎるわさ!』派。

それに加えて、『一体誰がラスクに、どんな修行を付ける?』という問題。

意見がバラバラに別れ委員会は内部分裂を起こし、あーだこーだと喧々囂々の議論が一昼夜ぶっ続けで行われ。

たまに拳や蹴り、念能力なんかも飛び出したりして……。

会議場となったビル一つを修復不可能なまでに粉々にぶち壊して、……ようやく緊急会議が終わりを告げた。

その光景を目の当たりにしていた俺はガクガクと震えているだけだったのだが……。

会議の末、服や体の至る所がボロボロになった育ての親達が、失禁してちよっぴり濡れた股間部分を必死に隠す俺に向かって告げたのは、

『4歳になったらラスクに修行をつける！全員で！』

と言うものだった。

たったそれだけを決めるのに建物一つ倒壊させる自分の育ての親達の非常識さを目の当たりにして、今更ながらビビりまくっていた俺だったのだが……。

それと同時に、前世と違って『俺はこんなにも愛されているんだ』と言うことが分かったりして、正直かなり嬉しかった……！

あ、ちなみにぶっ壊したビルは、ネテロおじいちゃんが代表で弁償しました。

死傷者が出なくて良かったよ、本当に。

そんなこんながあつて、俺が4歳になったと同時にようやく修行が始まった。

自分から言い出したものの、どんな無茶な修行をさせられるのかと戦々恐々としていたのだが……。

まずは土台となる基礎的な鍛錬から始めるといふ事に落ち着いたので正直ホッとした。

修行はとてつもなく厳しいモノだった。

ただし、前世の俺が同じ事をしたとしたら、だ。

転生した俺にとって、修行の日々とは本当に楽しくて、毎日がとても充実したモノだった。

なにせ、日に日に自分が成長していくのが、まさに手に取るように分かるのだ。

修行を始めた頃はたったの1回でへとへとになっていた腕立て伏せも、次の日には3〜4回も出来るようになっていた。

流石はハンターワールド。

誰が言ったか、『HUNTER×HUNTERの世界の空気はプロテインが含まれている』前世のネットでいつだったか見聞きした気がする。

どうやらそれはマジだったらしい。

別に急激に筋肉が付いてマッチョな5歳児になっちゃった!!なんて、そんな不気味な現象は起こらない。

しかし、年相応の体と筋肉しか付かないのにどんどん出来る事が増えていくのだ。

今現在、俺の見た目は明らかに5歳児相応なのだが、既に腕立て腹筋それぞれ1万回を数セットこなすのは余裕だし、短距離走でも長距離走でも前の世界の世界記録を易々と塗り替えられるだろう。

たった1年の修行でコレだ。

我が事ながら、ありえない……。

ファンタジー世界に生きているんだともう一度実感しました、俺。

しかし、修行を見ていてくれる親達は、物凄いスピードで成長していく俺を見て一様に驚きの表情を浮かべた。

どうやら、この世界の誰もが俺みたいな体じゃないらしく……俺は明らかに特別で、異常らしいです。

なんでだろ、俺が転生者って事が関係してるのかな? 魂のナンチャラがウンヌンカンヌン……? しらんけど。

まあとにかく、転生した俺に何も与えてはくれなかった生みの親。しかし俺を捨てたその両親は、どうやら特別な体だけは与えてくれたらしい。

その一点には感謝しないでもない。

この分ならもうすぐ念の修行に入れるだろうとのこと。

嬉しい！嬉しいすぎる。

一体俺は、何系なんだろうか？強化系？具現化系？もしかしたら特質系かもしれない！

そう考えるだけでワクワクしてくる。

そんなこんなで、俺ことラスクは5歳になった。

愛すべき育ての親達に囲まれながら、今はただひたすら修行の日です。

がんばるぞ！おー！

第3話

とある山奥にある、心源流拳法の修練場。

「3…2…1…ゼロ！そこまでっ！」

「……………っ！…………。…………、ぷはーっ！よっしゃー終わった！
！——あゝつかれた…………。」

服が汚れるのも気にとめずその場で床にぶっ倒れたのは、俺。

3時間全力で練を維持するという目標をようやく達成した！

……流石にもう疲労困憊だ。

「お疲れ様だわさ、ラスク。ようやくここまで来たわね。上出来よ！——ほらほら、そんなところに寝転がらない！」

そんな俺を見守っていた少女、ビスケが怒るが、さすがにもう無理…………。

オーラがすっからかんで、もう1ミリも体が動きません。

「お疲れ様です。ラスク君。」

両手にタオルとドリンクを持ってきてくれたのは、兄弟子のウイング先輩。

ウイング先輩は俺よりも前にビスケの弟子になっていて、現在心源流拳法師範代を目指して修行中。

なのだが、将来はビスケのように人を育てるということをしたいたようで『私の修行にもなりますから』と、もっぱら俺の修行をサポートしてくれている。

ウイング先輩は今年で22歳になるというのに、寝グセや服の着方がだらしないのがいっこうに直らない。

それを見られるたびに、ビスケに引っぱたかれているウイング先輩。

そそっかしいが、弟子である俺に優しくしてくれる、いいお兄ちゃんのような存在だ。

「それにしても、君には本当に驚かされます。君のような少年がこんなにも早く、念を修めるとは」

「ありがとウイング先輩……。ビスケももう無理！うーごーけーなうー！」

「全く……。しょうがないわねえ……」

そう言いつつも、ビスケは魔法美容師まじかるエステを発動させ、桃色吐息ピアノマッサージをしてくれる。

修行の時は鬼のように厳しいが、やっぱりなんだかんだ言ってもビスケも優しいのだ。

厳しくも楽しかったこの3人での修行も、遂に終わりを迎えるというのはちょっぴり寂しい気がするな。

今は1992年、原作開始の7年前だ。

俺が念の修行を初めてから4年たった。

それと平行するように心源流拳法を習い始めて、もう4年の月日が過ぎたのか……。

早いモノで、俺は今年で10歳になりました。

身長もぐんぐん伸びて、既にビスケ（少女形態）と同じ位の高さになった。

顔の方も段々とだが幼さが抜けてきて、順調にイケメン化しています。わーい。

『念を修めれば常人よりはるかに若さを保てる』ということは、成長は止まり俺はずっと6歳児の姿のままなのか…？と、これだけが心配だったのだが。

どうやら杞憂であったようである。

今まさに成長期の真っ最中なので、ビスケを見下ろす位の身長になるのもそう遠くはないだろう。

基礎となる体づくりの修行が一段落付いたのが、俺が6歳の時。

俺はようやく念修行が始まると喜んだのだが、そこで浮上したのが『誰がラスクに念修行をつけるか』と言う問題。

全く念を扱うことが出来ないシロウトの俺に念を教えるのは、今までのように育ての親達がそれぞれが好き勝手修行を付けるよりも、誰かが付きっきりで修行を見た方が効率が良く、また確実らしく。

またもや開かれたRSS会の緊急会議の末、俺の念の修行に関してはビスケが一任されることになった。

心源流師範代として何人もの弟子を育て上げたその実績もさることながら、念能力者としても達人と言えるビスケならば、と皆が納得した。

……まあRSS会員の全員が納得するまでの過程で、またもや一つの建築物が倒壊したのは言うまでもない。

とにかく俺は、この4年で四大行と応用技を一通り習得して、ついに練の持続時間が目標である3時間に達し、心源流拳法も一通りの基礎を身につけた。

『後はひたすら実戦経験を積みながら更なる高みを目指して修行に励むこと!』とはビスケの言。

12歳のゴンやキルアが今の俺の練と同じレベルに達するまで、天空闘技場で念を知ってから、キメラアントに挑む前位だから……。

確かその間、約1年だったと思う……。

……つまり、俺はその4倍の時間が掛かった計算になる。

10歳でここまで来た俺も十分異常なのだが、ホントニバケモノデスネ……アノコタチ……。

まあ、原作が始まるまで後7年もあるんだ。

俺は俺で、気長にやっていこう。

とりあえずの目標を達成した俺は、4年もの間お世話になったビスケ達に別れを告げ、一足先に山奥の修練場を後することにした。

2人とも名残惜しそうだったが、ビスケはここに残り、ウイング先輩が師範代になるための最後の仕上げをしていくらしい。

頑張れウイング先輩！ズシがあなたを待ってるぞ！

別に今生の別れでもなんでもないのに、目を潤ませるビスケにつられて、不覚にも俺までうるっときてしまった。

昔と同じように俺を抱きしめて、今度は俺の髪ではなく頬にすりすり頬ずりをするビスケ。

そして、それを微笑ましい物を見るような笑顔で見詰めるウイング先輩。

照れくさくなって、挨拶もそこそこに山を下りた俺の背中に向かって、2人はいつまでも手を振り続けていた。

このままビスケやウイングと一緒に修行を続けてもいいのだが、実はこの4年間ほとんど他の育ての親達に会っていない。

たまに修練場を覗きに来た人もいたのだが、ビスケが「修行の邪魔だわさ！」と追い返していたのだ。

そのかわりビスケによって、俺の修行風景を写した写真が一枚500ジェニーで希望者達に配られたらしい。

……って、カネ取ったのかよ!?？そしていつの間に撮った!?？

……まあとにかく、そろそろみんなに顔を見せておかないとね。

俺はこんなに強くなったんだぞー!というのも報告したいし、みんなと久しぶりに会えるのは楽しみだ。

誰かのハントと一緒に連れて行って貰って、お手伝いという名の
実戦経験を積むのもいいだろうし……。

天空闘技場にでも行って、ついでにお金を稼ぐのもいいかもしれないな。

となれば早速、まず最初にネテロおじいちゃんの所に行くとしようか。

早速ビーンズさんに電話して、飛行船を手配して貰おう!

俺はラスク。今年で10歳になった転生者。

今日も元気に生きています!

第3話（後書き）

主人公の念系統はまだ秘密ということで。

……実はまだ考えていないだけだったり／（＾Ｏ＾）／

第4話（前書き）

このへんから少し話の展開が遅くなる予定です。

※注意

ジャンプを読まず、コミックスだけを買って読んでいる方、ごめんなさい。

ラスクの育ての親達についての話に、単行本（29巻）に収録されてないネタバレが入っています。

と言ってもチラッと、殆ど名前だけです……。

それも嫌だという方は、申し訳ありませんが、該当部分（116行目辺り）と、後書きを飛ばして下さい。

第4話

山奥の修練場を後にした俺が、早速ビーンズさんが手配してくれた飛行船に乗り込んで数時間。

ようやく長い空の旅が終わり、ハンター協会本部に着いた。

顔パスで入り口を通してもらって（俺がネテロおじいちゃんの関係者だというのは協会本部の警備員も知っている）、エレベーターに乗り込む。

目指すは協会本部ビルの最上階にある部屋。

エレベーターから降りて、近くのドアを開けて部屋に入ると、ネテロおじいちゃんが畳部屋の真ん中に座って茶を飲んでいた。

「おお！ 帰ったかラスク！」

「ただいまネテロおじいちゃん！」

俺が来た気配には当然気が付いていたはずなのに、まるで知らなかったという風に驚いてくれる。

湯飲みを置いて、俺を笑顔で迎えてくれるネテロおじいちゃん。

その後ろには、彼が自分で描いた、黒地に白く『心』と書いてある巨大な筆字が飾られている。

達筆ですなあ。

巨大な『心』の額の直ぐ隣に、俺が正拳突きをしている写真が飾られているのは……まあ見なかったことにしよう……。

この部屋は主にプライベートで茶を飲んだり親しい友人と話したりするための部屋で、ネテロおじいちゃんの和風趣味が多大に反映された一室だ。

……そして、原作でネテロおじいちゃんの遺言が撮影されたのもこの部屋。

「フォッフォ……。それにしても、大きくなったのう……」

「……まあね！俺ももう10歳だし！」

畳に座ったまま、しげしげと俺の体を眺めるネテロおじいちゃん。

俺が大人になるまでは、なんとか長生きしてほしいものだが……。

まあ、キメラアントの王との一戦で自爆することがなければ、そのぐらいは長生きしそうだけだね。

余裕で。

「どれどれ……」

「？」

そう言って立ち上がったネテロおじいちゃん。

次の瞬間。

「——ふんっ！」

一瞬でその姿が俺の視界から消えたかと思うと、背後からの凄
いスピードの正拳が飛んできた！

「わあっ！！——つととと……」

とっさに横に飛んで避けたものの、ブンッ！と音を立てて俺の脇
の下を通過していく念の籠もった右拳。

あ、あぶね……。。

俺も結構強くなったと思ってたんだけど……まさに、間一髪だった。

ほんとに100歳オーバーのご老人ですか？と疑いたくなるが……。

まあそのあたりは、流石はネテロおじいちゃん。

立ち上がる瞬間、一瞬足に集まったオーラを見破れたから良かったものの……。

その威力の正拳をともに喰らっていたら……吹っ飛んでそのまま壁をぶち破って、ビルからアイキャンフライするところだったよ？

「ほお、今のを躲せるようになったか……。ふむ……。どうやら、ビスケに任せて正解だったようじゃの」

「イキナリあぶないじゃんか……！ギリギリ避けられたからいいけどさ！」

「フオッフオッフオ」

「まったくもう……。————それで！？どう！？おれもけっこう強くなったでしょ！」

「ふん。今のはワシの全力の1割ほどじゃ！まだまだ甘い、と言いたい所じゃが……。————その身に纏うオーラ。しっかり強くなって帰ってきたようじゃな！よくやった、ラスク」

「よっしゃー!! サンキュー、ネテロおじいちゃん!」

「この分ならワシと全力で組み手が出来る様になるのももうすぐかのう……」

「さすがにそれは、まだまだ先だって……」

「フオッフオッフオ!」

腰に手を当てて大きな笑い声をあげるネテロおじいちゃん。

この元気な笑い声を聞くと、帰ってきたんだなあゝって気になるね。

「それで? どうじゃった、楽しみにしていた念の修行の方は? 順調に進んだかの?」

「うん! いちおー四大行と応用技を一通り修めて、練は目標の3時間を達成したから……」

「ほう! それでは、後は実戦で経験を積みながら……といった所かの?」

「うん、ビスケにもそう言われたよ」

「そうかそうか……。まあとにかくせっかく久しぶりに会ったんじゃない。ゆっくりして行きなさい」

「はい」

ニコニコとあごひげを撫でながらそう言って、ネテロおじいちゃんは再び畳に腰を下ろした。

俺はネテロおじいちゃんの正面に座って、淹れて貰った日本茶を飲みながら。

修行の日々の思い出や、俺が居なかった間の他の育ての親達の話に花を咲かせた。

時間が経つのは早いモノで、あれやこれやと盛り上がっているうちに、いつの間にか既に日が暮れてしまっていた。

……おっと、そうだった。

これからどうするかネテロおじいちゃんに相談しないとな。

「そうそう、ネテロおじいちゃん。実戦経験を積むための場所なんだけど、俺、天空闘技場に行こうかと思ってるんだ」

「ほっ？ 天空闘技場か……。それはまた……」

「それである程度経ったら、今度はみんなに頼んでハントに連れて行って貰おうと思ってる」

「そうかそうか。皆喜んで連れて行くじゃろうな。———しかし天空闘技場か……。今のラスクにはちと、物足りないんじゃないかな？」

「そうなんだけどさ……。とりあえず自分がどこまで強くなったか知りたいし。それにやっぱり先立つものは必要というか……」

「フォッフォ！金稼ぎか！それならば彼処はぴったりの場所じゃない」

「うん！だから取り敢えず、みんなに顔を見たらすぐにでも行こうかなって思ってるんだ」

「ふむ……。4年もラスクに会えず、RSS会の皆寂しがつておったしのう」

「俺も久しぶりにみんなに会いたいな」

「今は居らんが、サンビカも、リンネも……。それに『十二支ん』の連中も大分寂しがつておったぞ。———ジンとパリストン以外じゃが」

「ははは……」

まあ、あの人達はね……。

そもそも、一度も預けられたことがないし、それで良かったと思ってる。

ジンに預けられたりした日には、幾ら命があっても足りないような気がするしね……。

いや、気がするんじゃないかな！うん！

どっかの山奥にムリヤリ連れて行かれて、魔獣を釣るエサとかにされそうだし……。

パリストンは性格もアレだが……なんかイケメン過ぎてむかつく。

あのムダに白い歯とか。

「それじゃあ早速RSS会員に招集を掛けるとするかの……」

「お願いしま〜す」

「うむ。世界中に散らばってるあやつらのことじゃ。集まるまでしばらくかかるじやろうし、とにかく今日はゆっくり休みなさい」

「は〜い！」

そう言うと、ネテロは部屋を出て行った。

和風の畳部屋に残ったのは、俺一人。

目の前にあるお茶は既に冷めてしまった。

……うん、決めた。

今までもそうだったけど、こうして久しぶりに会って再確認した。

『ネテロおじいちゃんがあんな自爆なんて形で死を迎えるなんて、俺は認めたくない』

俺はネテロおじいちゃんが大好きだ。

ビスケも、他の育ての親達も……みんな。

だれも、絶対に、死なせたたくない。

俺に前世の記憶があると。

この世界が前世で漫画になっていたと、話してみようか……？

そんなことはありえないと、頭でも打ったのかと、そう言われる

だろうか。

いや……必死に説明すれば、みんななら信じてくれるだろう。

だが、万一信じてくれたとしても。

原作を知った誰かが、ネテロおじいちゃんを引き留めようとして
も。

ネテロおじいちゃんは、自分が死ぬ未来が分かったとして、その
未来から逃げ出すような人だろうか……？

違う。そんなハズはない。

それは今まで育てて貰った俺が、だれよりも分かっている。

むしろ嬉々として、王に立ち向かうだろう。

そうなる……むしろ原作知識をみんなに教えることは逆効果に
なる。

本気になったネテロおじいちゃんをとめるのは、誰にも不可能だ。

例え今すぐ準備を始めたとして、ネテロおじいちゃんは王を倒せ
るだろうか……？

……正直、想像できない。

それ程、王は圧倒的だった。

伸び代がある分だけ、未だ俺の方が王を倒せる可能性は……ある
と、信じたいが……。

やはり難しいだろうか……？

でも、もう決めた。

決めてしまったんだ。

簡単にいかないのは分かってる。

俺は、絶対にネテロおじいちゃんを死なせない。

そのために、今、俺に出来る事は……。

第4話（後書き）

※注意

←は、「ネタバレ？私はいっとうにかまわん」という人のための説明です。

《サンビカ（サンビカⅡノートン）》
ウィルスハンター（シングル）。ハンター協会の女医さん。美人（作者私見）

《リンネ（リンネⅡオードブル）》
グルメハンター（ダブル）。協会最年長のおばあちゃん。ネテロと違ってヨボヨボ。

《十二支ん（ハンター十二支ん）》
ネテロ会長がその実力を認めた十二人。
有事の際に協会の運営を託す他、ヒマな時遊び相手になってもらったりしていた。

それぞれにコードネーム（子、丑、寅、卯…）が渡され、会長に心酔するメンバーのほとんどはその名に合わせ、改名したりキャラ変するなど涙ぐましい努力をしているが、例外もある。メンバー全員が星の称号を持っている。

ゴンの父親であるジンもそのメンバーである。

《パリストン（パリストンⅡヒル）》
ハンター十二支んの子。^{ねずみ}?ハンター（トリプル）。ハンター協会副会長。

他のメンバーから大分嫌われてるっぽい。実際嫌なヤツ（作者私見）

第5話

深夜、協会本部にあるネテロおじいちゃんの部屋。

あれから、どうすればネテロおじいちゃんを死なせないように出来るのか…。

今、俺に出来る事は何なのか、ずっと考え続けている。

考え続けて…、いるんだけど…。

「うがー！ー！！」

考えても、考えても！

どうしたら良いのか、さっぱり思い付かん！

プロハンターでもない俺じゃあ大した事は出来ないしなあ…。

俺じゃなくて、みんなに頼んでキメラアントを探して貰うにしても、バルサ諸島近海やミテネ連邦を監視する体制を作ってもらっても。

かなりの理由や根拠が要るだろうし…。

理由や根拠を説明するには、やっぱり原作の事を話さなくちゃならないだろう。

でもやっぱりそれは…。

それに、そもそもそれでキメラアントの発生を食い止められるのか分からない。

そうだ！

今からキメラアントを探して始末しちゃうか！？

そもそもキメラアントって、確か第一級隔離指定種だったよな。

つまり…、何処かの国とか組織が嚴重に隔離してるってこと。

なんでそんな危険な虫を駆除じゃなくて隔離なのか分からないけど…。

まあ第一級っていう位だからよっぽど嚴重に隔離されているはずで、そのキメラアントが逃げ出して突然変異したとは考えにくい。

つまり、この世界のどこかに未だ発見・隔離されていないキメラアントが居るかもしれないってことだ。

それを探すか？

…マジで？

前の世界では、アリは地球上に『1京匹』居るって言われてた。

この世界でも同じようなモンだろうし、その『1京匹』のアリの中からキメラアント1種類だけを探す…？

……無理です！

そう言う念能力でもない限り！

……俺には無理だな。

やっぱり『王を産む前に女王を倒す』これだな！

女王はNGL自治国に漂着して摂食交配を行って巣を作った。

打ち上げられた所をすぐに始末するにも、どこに漂着するか分からない以上待ち伏せは無理。

とするとゴンやキルアがG・Iをクリアする辺りでNGLに潜入して、女王が人間を喰うのを阻止するのがいいかもしれないな。

そうすれば、師団長クラスの奴らも護衛軍も居ない内に倒すこと

が出来る！

でももし、俺が女王を倒せなくて逆にエサにされてしまったら……？

……うあああああ！嫌だあああ！嫌すぎるっ！

もし俺が喰われたら一気にキメラアントの戦力が増しちゃうことになるし……。

……やっぱりカイト達か、もしくはポツクル・ポンズ達に同行するのが最良かなあ？

そうすれば、もしかしたら彼らの命も救うことが出来るかも知れない！

しかしその場合女王を倒すためには、女王を守るネフェルピトーや師団長等の強敵達を突破しなくちゃいけない……。

ううゝむ……。……。

……うん、とにかくまずは修行だな！

女王を倒すにしてもなんにしても、俺が強くならなきゃ話になら

ない！

「よっしゃー！やったるどー！！……と、その前に」

長い時間考え込んでいたから、喉が渴いた。

時計を見ると、もう既に深夜三時をまわっている。

湯飲みを手にとって……って、ありゃ？

ネテロおじいちゃんが淹れてくれたお茶はもう全部飲んじゃったのか…。

んー、急須には未だちょこっと残ってるな。

「ふっ…」

しかし！

こんな時のために、俺には『秘策』があるのだ！

今までやってみたことは無いけど多分イケルはず！

……まあ、アレを知っている人なら簡単に思い付く事だろうけどね。

「ふふふ…」

まずは、急須に残ったお茶を湯飲みに入れて…。

そんでもって、両手を湯飲みにかざして…！

「『練』！」

すると、湯飲みの底に少ししかなかったお茶がドンドンとその量を増し始めた。

そのまま練を続けると、あっというまにお茶が湯飲みいっぱいまで増えていく。

「おおっととと………」

お茶がこぼれる前に、湯飲みの口ギリギリまで増やした所で練をとめる。

……おわかり頂けたでしょうか？

つまる所、俺は『強化系』だったのだ！

今行ったのは、能力者自身の念系統を判断するための『水見式』。

この水見式を強化系が行った場合、水の量が変わる。

水が減ることもあるのかも知れないが、俺の場合はゴンやウイング先輩と同じように増えるのだ。

つまり『秘策』というのは、飲み物を増やすこと！

……うん、それだけです。

パームがコーヒーを増やしていたから出来ると思っていたけど……。

こうも上手く行くとはね。

前世で俺は、大好物の○カ・コーラを水見式で増やしたいと何度思ったことか！

まあ今はお茶だけど……。

とにかく、早速飲んでみよう！

「んぐっんぐんぐ…」

おお！飲める！飲めるぞ！

やっぱりネテロおじいちゃんの買う茶葉は絶品ですね！

あれだけ急須に放置しててもこんなに美味しいんだから。

甘みがあつて……それでいて渋みがあつて……。

つてあれ……？

『甘み』？

ちよつとお茶にしては甘すぎないかコレ!?

「ブーーーーーー！……っ！？な、な、な……
！？」

なんだこれ!?

何で!?! どうして!?!

強化系ってただ水の量が変わるだけじゃ無かったのか!?

最高級のお茶といっても流石に甘すぎる!

っていうか、むしろこの味は……!

「な、な、なんで……。――なんでお茶がコーラ味になつとるんじゃああああ!」

じゃああああああ……。!じゃああ……。!ジャアア…

俺の絶叫が、深夜のハンター協会本部に響き渡った。

第5話（後書き）

ということで、主人公は強化系（？）にしました。

キメラアント対策について納得できない部分多々あると思います。それについては、強化系である主人公は「単純バカ」なのだ、という事でお願いします……。

散々考えた末、出てきた結論は結局「強くなる！」です。脳筋です。

むしろ作者の頭では、主人公に完璧なキメラアント対策をさせつつ原作に絡めさせる上手い展開が思い付きませんでした。

大きな山場となるキメラアント戦を無くしてしまうのも勿体ないですし…

ごめんなさい。

第6話

一体どういう事なんだ？

俺は強化系じゃなかったのか！？

たしかにコーラは好きだったけどさあ……。

水をコーラにしてもシュワシュワ炭酸がないと、ねえ？

ん？……そうか！炭酸水をコーラ味にすればいいんじゃない！

俺って頭よくね！？

ってそんなこと考えてる場合じゃない！

今はとにかく……困った時は、ビスけえもん！

と言う訳で早速電話！

『Trrrr……Trrrr……Tr、………はあい……。』

「……もしもし！ビスケ！？」

『——一体どのどいつ…？こんな時間にあたしに電話掛けてくるアホは……』

「俺！俺だよ！」

『……あたしを詐欺ろうなんて、随分命知らずなようね？』

「ちがう！俺！詐欺！ちがう！俺！ラスク！」

『ん？ラスク？……ふあゝあ。一体こんな時間にどうしたっていうのよさ……。夜更かしはお肌の天敵って言葉を知らないの？』

「知ってるけど！ビスケのお肌は今はどうでも良くて……！」

『……へえ？』

げ！やばい！

思わずとんでもないことを口走ってしまった！

わざわざあんな能力、魔法美容師まじかるエステを作った位だ。

ビスケのお肌に対する執着は尋常じゃない。

……電話で良かった。

面と向かってたら、俺といえども本気でぶん殴られて、バラミたいに顔面メチャメチャにされてたかも知れない……。

やばい……。

「ゴメンナサイ！ゴメンナサイ！！お肌関係あります！！ビスケのお肌は常に綺麗じゃなくちゃいけません！」

『ふうん……。——命拾いしたわねえ？ラ・ス・ク？』

「あ、あははは……。——って違う！俺が言いたいののは、えっと、えーと……。そう！お茶がコーラになったんだよ！」

『ハア？何ワケ分かんないこと言ってるの……。もしかして寝ぼけてるんじゃないの？』

「違うんだって！ホントに！ホントにお茶が……！」

『はあ、まったくもう……。いいから落ち着いて、ちゃんと始めから順に説明してみなさいな』

「う、うん。分かった……。えーと……。」

俺はネテロおじいちゃんが部屋を出て行った所から順に、お茶がコーラ味になるまでの経緯をビスケに話した。

ビスケは慌てる俺を宥めつつ、時に上手く相打ちを入れてくれた。その甲斐あってか数分も経った所で、一言で終わるはずの事の経緯をようやく説明し終えた。

「それで、飲んでみたらお茶がコーラ味になってたっていうワケ。……ふう」

『ふむ……』

「ビスケ、コレが一体どういう事なのかわかる？」

『分からないわ。…そんな話聞いたこともないわね』

「そっかぁ……」

『…でも分かったこともあるわさ』

「え？」

『水見式をした場合、強化系は水の量が増える。確かにラスクはお茶の量を増やした。これはいいわね？』

「うん……」

『それじゃあ味が変わったのは？水見式で水の味が変わるのは何だったかしら？』

「確か水の味が変わるのは……変化系？」

『そう。あんたがさつき水見式をした時——まあ水じゃなくでお茶だから『お茶見式』かしらね？——お茶の量と、水の味、両方に変化があった。……つまり？』

「俺は『強化系』で……。それに『変化系』でもある……。ってこと？」

『そういうことになるわさ。でもそうになると、『特質系』と言えなくもないわね……』

「特質系……？でも、そんな事ってあり得るの？」

『だから『聞いたこともない』と言ったのよ。2つの系統を持つ念能力者なんて、今まで全くね。——修練を積む事によってそれに限りなく近づけることは出来るでしょうけど、原則的に2種類の変化が水見式に現れる事はない。そう言う意味で『特質系』と言っただけであって、実際は2つの系統を備えているってことなんですよけどね。特質系なら他と全く違う変化が出るから』

「そっか……」

そりゃあそうだ。

ビスケが知らないというのも無理はない。

原作の知識がある俺でさえ知らないんだから。

そういえば似たような能力で、クラピカの絶対時間エンペラータイムがあつたつけ。

まあアレもかなり特殊な例だと思うけど……。

俺の場合、絶対時間エンペラータイムの発動条件である緋の目発動とその副作用がない代わりに……？

いや、待てよ？そもそも強化系100%、変化系100%だとは限らないよな。

両方を90%ずつ使えるって事かも知れないし……。

そうなるただの器用貧乏になりそうだ……。

そういえば俺、『放出系』が半端じゃないほど苦手なんだよなあ……。

放出系というか、体から離れたオーラを扱うのが物凄くダメなのだ。

ゴンがやっていた「人差し指から念弾を放つ」と同じ修行をやっているんだが……。

そもそもオーラを体から切り離れた状態で維持するのが難しい。

かなりの時間修行したというのに、俺の場合豆粒ほどの大きさのオーラを、10秒維持出来るか出来ないか。

ましてやそれを飛ばすなんて無理無理無理イ！

目標に当たる前に、っていうか指先から離して50cm位で消滅する。

放出系が苦手なのと関係あるのか分からないけど、俺の円なんて殆ど練と同じようなモンだしね。

パーセンテージで示すなら……多分放出系20%とかカナ？あはは……

おかしいと思ったよ。

変化系の系統別修行は強化系のそれ並に得意だし。

強化系なら放出系は80%発揮できるハズなのに。いくら修行してもゴンよりも上手く出来なかった。

ある意味、バランス取れているんだろうけど……なんだかなあ。

『ラスク。…あんた自分で何か心当たりは無いの？』

しばらく俺の系統について考え込んでいたのかさっきまで黙っていたビスケが、急に質問を投げかけてきた。

こ、心当たり……？

「そ、そんなのあるわけないよ」

『本当に？……あんたが『捨て子』だった、と言うこと以外で何か無いかしら……？』

「うん……ネテロおじいちゃんに拾って貰ってから、ビスケも知っている通りだよ……？」

『……』

ビスケの沈黙が、痛い。

違うな……、ビスケに嘘をついたから、痛いんだ。

本当は、俺に心当たりがあるのだから。

俺が普通の念能力者と違う所。

クラピカと同じように、俺の特殊な部分。

普通の人間と違う所。

それは……元々この世界の人間じゃなかった『転生者』だと言う事。前世の記憶があるっていう事。

でも……これは、今は未だ話せない。

『……………』

「……………」

『そう……………』

「うん……………。…………ごめんね、ビスケ」

『いいわ。深くは聞かない。——でもねラスク。あたしはあんたを、大事な本当の息子のように思ってる。とにかくそれは忘れるんじゃないわさ』

「ごめん……………」

『違うでしょ？ こういう時はなんて言うんだったかしら？ あたしはちゃんと教えたはずよ？』

「うん。ありがとう、ビスケ……………」

『そうね、良くできました』

……勘の良いビスケのことだ。

この分だと何かは分からないまでも、俺に何か秘密があるってこ

とは、もうとづくに知っていたんだろうな……。

もしかしたら俺の育ての親達も、みんな気付いているのかも知れない。

でも今も、今までも、俺に何も聞かなかった。

気付いてないフリをしてきているんだろう。

やっぱり優しいな、ビスケも……みんな。

いつかきつと話そう、全て。

「……」

『とにかく！ちゃんと調べてみないと詳しいことは分からないけど、普通の念能力者が1系統しか極められないのに対して、ラスクは2つの系統を極めることが出来るかもしれない。これは物凄く大きなアドバンテージだわさ！』

「……うん！」

『その分修行は難しい物になるでしょうね。——二兎を追う物は一兎も得ず。普通和能力者が主に1つの的に重点を置いて修行する所を、あんたは2つの的を追いかける必要はない』

「2つの的……」

『でも、あんたはまだ10歳！このまま頑張り続ければ、いつかは世界一の念能力者になるのも夢じゃないわさ！』

「うん…！そうだよな！———よっしゃあああ！燃えてきたあ——！」

『今までは強化系をメインに系統別の修行をしていたけど、これからは変化系の修行も重点的に行ってみなさいな』

「了解しました！」

『ふふっ……。——あ、そうそう。ジジイから連絡来たけど、あたしはそっちに行けないからね。ひよっこウイングの面倒を見なくちゃいけないし』

「分かった。みんなに伝えておくね」

『そうしてちょうだい。本当は今すぐラスクの所に行きたいんだけど……。そうね……。RSS会の皆の前で実際に水見式をして見せなさい。きつと詳しく調べてくれるでしょうし、相談に乗ってくれるハズよ』

「うん、そうしてみる！ありがとうビスケ！」

『いいのよ、他ならぬラスクのことなんだから。———まああたしの『お肌』の事については今度じっくり話しましょうかねえ…？うふふふふふ……。』

「……ソレデハワタクシ、ソロソロ寝ルコトニシマス」

『まったく……。それじゃあおやすみなさい、ラスク。——あ、そうそう。ちょっと待ちなさい。もう一つだけ言わせて頂戴』

「ん？どうしたの？」

『あんた確かまだ『発』考えてなかったわよね？』

「うん。強化系だとばかり思ってたから、とにかく今は基礎を伸ばしてれば良いかなって」

「そうね。それでその発のことなんだけど、変化系を100%使えるかもしれない事が分かったからといって、焦って作らないようにしなさい。まずは自分の特性を完全に把握することが第一。それから発を考えるのでも決して遅くはないわさ」

「わかった。今まで通りの修練と、変化系の系統別修行をすれば良いんだね？」

『そういうこと。それじゃあたしももう寝るから。あんたもあんまり夜更かししないようにしなさいな』

「はーい！それじゃ、お休みビスケ」

『おやすみなさい、ラスク』

プツ……。プツプツプー……

ふう……。

やっぱりビスケに相談して良かったな。

困ったときはビスけえもん、頼りになる。

それにしても驚いた……。

変化系、か……。

おそらく俺が転生者だって事が関係してると思うんだけど、絶対とはいえない。

前世の俺のオーラが変化系だったとか？

いや、前世の俺からオーラなんて出たこと無かったし！

一時期、毎日のように燃える方の『燃』をしてたこともあったのに、精孔開かなかったし！

出てたのは腐臭くらいのもんだったよ……？

そもそも転生ってなんなんだろう……？

な〜んて、考えても答えなんて出るはずもなく。

そのへんはまさに神のみぞ知る、だ。

あいにく、俺が転生した時に神様が出てきてあれやこれやと説明してくれたワケじゃないからな……。

元々この体がそういう風に来ていたってこともあるかも知れないし。

とにかく！俺には強化系と変化系両方の素質があるって事が分かった。

ならばひたすら修行あるのみ！だな！

第6話（後書き）

どうしよう！話が全然進まなくなっちゃった＼（＾Ｏ＾）／

次は天空闘技場に行きます！多分……

炭酸水を用意するなら、コーラを買った方が早いと言うことに気付かない主人公。

自分の念系統の事なのに深くは考えない主人公。

結論はやっぱり修行の主人公。

嗚呼どんどん単純バカになってゆく……。

第7話

空に浮かぶ飛行船の中。

RSS会のみんなと別れを告げて、数日。

俺は今、優雅な空の旅を楽しんでる。

今は1993年。俺は11歳になった。

そう、あれからもう既に1年が経過した。

本当はもっと早く皆と別れるつもりだったのだが……。

流石に4年もの間一度も会えなかったせいか、予想以上にRSS会の人々に引き留められてしまったのだ。

『俺にも予定があるんだ!』とは言ってみた物の、久しぶりにみんなに会えて嬉しいのは俺も同じなので、ホイホイ引き留められちゃいました。テヘ。

まあ引き留められたといっても、ただ遊んでいた訳ではない。

念能力者となって初めてみんなと組み手をしたり、修行を手伝ってもらったり。

保護者同伴で、見聞を広めるために世界中のいろんな所を旅したり、秘境と呼ばれるような場所に行っては、サバイバル等様々な訓練や修行をしながらキメラアントを探してみたりもした。

結局キメラアントは見つからなかったが、凄く充実した1年だった。

そうそう。そういえば、俺の「お茶がコーラ味になっちゃった事件」があったな。

ビスケが言った通り、俺の水見式をみんなの前でやってみせたのだが……。

みんなは前代未聞とも言える俺の水見式に、まあ驚いたといえば言えば驚いたのだが、『へー、こんなこともあるのか』程度だった。

誰が言ったか『お茶を増やして飲もうなんて貧乏クサ〜〜やっぱりラスクはアホ〜〜！でもそこがイイ〜』だとか『2系統だ？今更驚かねえな。ラスクだし』という言葉。

そんなもんですか……。

少しだけ俺の眼から涙がこぼれた。

まあ。たいして驚きはしなかった物の、やはりみんなも一流と言える念能力者というだけあって、俺のオーラの性質自体には興味津々だった。

様々な実験を行った末に、出た結論。

『頑張れ、ラスク』

えーっと……それだけですか？

まず、2つの系統を同時に極めるというのは、果てしなく難易度が高い。

それに加えて、俺の各系統の習得率とはにかくバランスが悪い。

特に放出系が他に比べて酷い。

そう言う意味での、頑張れだったらしい。

『各系統はバランスよく、自らの系統を頂点とした綺麗な『山なり』になるよう鍛錬する』というのがセオリーだ。

『バランスが良い能力者⇨安定して強い能力者』、という図式が成り立つのが念を使った戦闘。

それをきちんと考えて修行しなくてはならないのだが……。

俺の場合そうは行かない。

『山なり』所か……、なんていうか、『絶壁』？

俺にとって、バランスの良い能力者になるというのは、まさに冬のエベレストをハダカで登るような物。

気が遠くなるほどの修練が必要になる。

だが『バランスが良い能力者』最強の能力者』ってワケじゃない。

……ハズだ。

みんなと色々相談した結果、俺が目指すのは究極の特化型。

駄目な物はダメ。無理な物はムリ。いっそ開き直って、長所だけをとにかく伸ばす。

幸いにも強化系なので、一応攻守のバランスは取れている。

目指すは圧倒的なオーラでとにかく相手に近づいて戦う、究極のインファ이터。

まさに脳筋！ウボオーギンを思い出すね。

だが俺はウボーとは違って変化系もあるので、オーラの形状変

化だけでなく、他系統では出来ない『オーラをの性質を変化』させる発も会得できる。

まだ思い付いてないけど、その性質次第ではかなり上手く行くよ
うな気がするな！

え？ 遠距離攻撃？

そんなこと出来ませんよ、何言ってるんですか。

ビスケが評したように、ゴンのジャジャン拳、アレはまさに近・
中・遠バランスの取れた応用の利く良い必殺技だ。

もし俺がジャジャン拳をするならば、『グー！チー！……グー
！グー！ちくしょー！チー！！』って感じで、とにかくその2つし
か出せない。

つまり俺から距離を取って戦えば、なぐんにも怖くないのだ。

距離を取られたら、また近づけばいい？

でも、『決して自分に相手を近づけさせない』という様な能力を
持つ相手だったら…？

どうしようもないっすね。うん。

俺のような特化型の能力者だけに当てはまる物ではないが、どん
な念能力を持っているのか分からない未知の敵との戦闘は、1戦1

戦がまさに賭。

しかし、俺に限って言えばそれは当てはまらない。

なぜなら、原作の知識があるのだから。

相性の悪い敵やかないそうもない敵との戦闘はとにかく避けられ
いいのだ！

そして更に修行して、強くなってから倒す！

これで万事解決！

キメラアントとの戦いでは、そうも言ってもらえないけどね……。

とにかく、原作開始まであと6年！

6年という短いような長いような、そんな時間で、果たして俺が
何処まで強くなれるのか。

ネテロおじいちゃんを死なせないために！

そして、建ちまくるであろう俺自身の死亡フラグをぶち折るため
に！

とにかく、やるしかないのだ！

飛行船に揺られる事、数時間。

「やっと着いた〜！」

ここはパトギア共和国にある天空闘技場。

「うわ〜！下から見ると高けえ〜！！！」

流石は地上251階、高さ991mもある世界で四番目に高い建物だ。

前世で俺が間近で見たことがある一番高い建築物といえば、修学旅行の時に見た東京タワーで確か333mだったから約3倍だ…。

これで世界第4位って言うんだから驚きだな。

保護者同伴で世界を旅していた時に、飛行船の上から何度か1〜3位も見ただけもあるが、どれも凄まじかった。

建物がはるか上空の高層雲を突き破るとかありえないよね、常識的に考えて。

最上階では酸素を供給するポンペを背負うなり、階層自体にそういう装置なりが必要なんだろうな……。

それってどうなのよ。

……まあファンタジー世界に細かいツツコミを入れてもしょうがない。

いつまでも眺めて居る訳にも行かないし、さっさと登録を済ませるのでしょうか。

「げ……」

挑戦者専用の入り口へと向かうと、そこには人、人、人……。

まさに人がゴミのように……厳つい自称腕自慢達がひしめき合っていた。

今思い出したが、確か天空闘技場には毎日物凄い人数の挑戦者がやってくるんだっけ？

それにしたって多すぎる……。

そういえば俺、前世で半分引きこもりみたいなモンだったんだよなあ。

人混みは凄く苦手だったんだ。

どうやら、そういう所は転生しても変わらないらしい……。

こんな人混みなんて転生してからも初めての経験。

うあゝ気持ち悪い……。

「どうしよう、帰ろうかな……」

と、思わず口に出してしまったのも無理はないだろう。

ざっとみたところ、400人は並んでそうだぞコレ……。

それを遠巻きに見ている連中もその倍は居る。

もし今から並んだとしたら、2時間以上は余裕で掛かるんじゃないだろうか。

その長い時間、この人ゴミに埋もれ続けるのか……？

「マジで帰ろうかなあ……。——ってダメだダメ！」

『一度やると決めたら最後までやり通す』これが今世での俺の目標！

前世ではいろいろなモノに挫折して、諦めて……。そうやって生きていた。

そうして結局何を成すでもなく、あっさりと死んだのだ。

でも今は違う。

何故かこうして再び、生きている。

せっかくの2度目の人生だ。今度こそ俺は何かをやり遂げる！

「よっしゃあああ！やったるどー！」

俺は気合いを入れ直すために、雄叫びを上げた。

周りに人が山ほど居るというのに、恥も外聞もなく。

周りの屈強な男達は、『なんだこのガキ？』というような眼で俺を見ている。

だが、もう気にならない。

こういうことも、前世では絶対に出来なかった事だ。

やっぱり俺も成長しているってことだな！

「ねえ」

「ん？」

そうして俺が自分の成長を実感した喜びに浸っていると、背後から誰かに声を掛けられた。

「そんなトコロでなにしてんの？さっきから見てたけど、ブツブツ独り言言ってたとおもったら急に叫び出すし」

「え？んゝ……、なんていうか、気合い？」

投げかけられた質問に答えつつ、声の主の方へと振り返ると。

そこにいたのは……。

って誰も居ない？

「へえ〜。ま、どうでもいいけど。正直キモイからやめた方が良
いぜ。——ってオイ、どこみてんだよ！下だよ下！」

「キモイ……？あんだところあ——！！——って……、へ
…？」

いまだ舌っ足らずで上手く怒鳴れないながらも視線を下に降ろし
てみると……。

そこにいたのは、俺より年下であろうほどの少年。

だがその容姿は……。

「なんだよ」

「え、いや……。——…エ？」

ゴシゴシと目蓋を擦ってみても。

変わらず俺の目の前にいる少年。

「だからなんなんだよ！」

「あ、ゴメン何でもない……。——って、ええええええええ！」

「うるせーよ！」

その特徴的な髪色と、鋭い目つきはもしかして……。

でも、なんでこんな所にいるんだよ!?

一体どうなってるんだ!?

第7話（後書き）

果たして、ラスクが見た少年とは！？

一体誰なのか！！

バレバレですね。

第8話（前書き）

※感想で指摘を頂きました、4話の後書きでのサンビカの説明文を一部削除しました。

「死にかけていたラスクを救ったのはサンビカという」という一文です。

大変申し訳ありませんでした。

第8話

俺の目の前にいるのは。

銀がかった特徴的な髪色と、猫のようにつり目がちな瞳。

まさしくあの少年をそのまま小さくしたかのような容姿。

前世で何度も読み、見たことのあるその人物とは。

そう、『キルア』だ。

でも何だって今、こんな所にキルアが居るんだ？

「で？何なんだよ。人の顔を見てイキナリ叫びやがって」

「あ、いや……なんでもないんだ、ウン。———キル……。き、君みたいな子供が、こんな所に居るなんて思わなくてさ」

「ハア？何いってんだよ。そっちだってまだ子供じゃん。はっきり言ってさ、かなり目立ってたぜ？」

危ない危ない……。いきなり名前を呼んでしまいそうになった。

しかし、原作6年前だっていうのに、キルアあの生意気な物言いは何ら変わらず……。

初対面で年上の人とは敬語で話さないって教わらなかったのか！？

どんな教育してるんですか！……ってゾルディック家の人々か。

それならしょうがない。

「で？アンタ名前は？年はいくつ？」

「俺？俺はラスク。11歳だよ」

「ふーん……ラスクか。——なんか、お菓子みたいな名前じゃん」

「正解。俺の名付け親がさ、ビスケットっていうんだ。だから、甘い焼き菓子つながりでラスク」

「ふーん。——あ、オレはキルア。6歳ね」

「おっけーキルア。よろしく」

原作前にキルアと会うつもりなんて全くなかったから、あまりに急だったので驚いてしまったが……。

だってゾルディックだよ……？キルアの兄はイルミだよ……？

もし、目を付けられたりなんかした日には……、針人間にサレチヤウ。

でも、やっぱり……嬉しいのは間違いない。

こうしてハンターハンターの主人公の一人に会えたのだから。

転生って、本当に良い物ですね……。

……今はまだ会いたくなかったけど。

って、6歳……？キルアは今、6歳って言ったよな？

「ラスクはさー、何でこんなトコロにいるワケ？」

「……。6歳か……」

「シカトすんな！」

「あ、ごめんごめん！考え事してた。……で、なんだっけ？」

「だーかーらー！11歳のラスクが何でこんなトコロにいるのか聞いてんの！」

「何で？んゝ……。――金稼ぎ、かなあ。……。あと修行！」

「へー、カネかー。俺はオヤジにムリヤリ……。まーいいや。――
――で、ココってそんなに稼げんの？」

「190階までいけば1試合勝つと2億ジェニーとか貰えるんだよ、確か。凄いよね」

「ふーん。2億ジェニーってどんくらい？チョコロボ君何個買える？」

「え、感想それだけ！？そ、そうだなあ……。――チョコロボ君は一個150ジェニーだから……。いち、じゅう、せん……。100万個ぐらいかな」

「100万個！？マジで！？すげー！2年分も一気に買えるじゃん！」

「うん、多分だけど……。――って、2年！？そして2億ジェニー全額チョコロボ君につき込む気かよ！？この街のチョコロボ君全部買い占めるつもりか！？」

「「……」」

「って、あれ？キルア……。――もう居ねえし！！」

早ッ！もう後ろ姿も見えない。キルアは早速登録しに行ってしまったようだ。

どんだけ好きなんだよ、チョコロボ君……。

それに金銭感覚が見事にお狂いになっていますね、キルアおぼっちゃま。

「（まあ……ゾルディックだし、しょうがない）」

「「「……」」」

コレ便利だな。あの暗殺一家の非常識さを言葉にするのには、これだけで事足りる。

そして、またもや大声を出してしまったために、周りの男達の鋭い視線が痛い。

なぜ、俺が『6歳』というキルアの言葉に引かかったのか。

キルアはオヤジに、つまりキルアの父親であるシルバにココ天空闘技場に放り込まれた経験がある、なんてエピソードがあった。

それが確か、キルアが6歳の時で。つまり今年だ。

その言葉を聞くまではすっかり忘れてしまっていた。

今は原作6年前で、開始時12歳のキルアが今6歳だって言うこ

と位少し考えれば分かっていたはずなのに。

365分の1の確率でいきなり遭遇とか、ドンだけ運が悪いんだ俺は。

迂闊だった……、キルアが来ると知っていれば天空闘技場なんて来なかった。

原作開始時ならばまだしも、今の俺じゃ到底イルミに敵わない……。

俺の勝手なイメージだけど、あのブラコン兄貴なら何処かで隠れてキルアを監視していても不思議じゃあない。

『キルアと親しげに喋るラスクを、物陰から観察するイルミ。』

そのイルミの心には嫉妬からか……、はたまた単純な憎悪からか。とてつもないほどの禍々しい感情が、イルミの心の中で渦を巻いていた。

「キルアに近づく男……。殺す」

何事かを呟いたイルミは、キルアがラスクの傍を離れた所を見計らい、物陰から飛び出した。

物凄い早さで地を這うように駆けるイルミ。

その右手には、いつのまにか数本の針が握られていた。

一瞬でラスクに肉薄したイルミはその右手に持った数本の針を、ラスクの心臓に勢いよく突き刺した。

グサーーーーッ！

「ギャーーーーー！」

ラスクは死んだ。

』

……。

……うわぁ、ありえる。

どうしようマジで今から帰ろうかな……。

「ちえっ……」

怪しい人物が物陰に隠れて居ないかどうか周囲に目を凝らしなが

ら、俺がビクビクと身震いしながら警戒していると。

舌打ちをしながら、ふて腐れた様子のキルアが戻ってきた。

ポケットに手をつ突っ込み、地面に落ちている小石を蹴りながら、
……こっちに向かってきますね。

その頬に付いた、数滴の赤い液体は一体なんなんですか……キルアさん……。

ど、ど、どうしよう。

「チッ……。割り込み禁止、とかいわれて追いつかれた……」

「ソ、ソウデスカ」

「?なんでそんなしゃべり方なんだよ、ラスク」

「イエ、ナンデモアリマセン」

「なんだよソレ。なんかの遊び?おもしろくね」

「ア、アハハハ……」

ダメだ!ダメなんだキルア!!

そんなに親しげに話しかけてくれるのは嬉しいけど……、今はダメなんだ!

俺にはやらなければならないことも、やりたいこともまだまだ沢山あるんだ！

今死ぬ訳にはいけないんだ！

よし！帰る！帰るぞ俺は！

「ソ、ソレジャ、オレハ、カエルカラ……」

「おーい！ラスク！ココが最後尾だってさ！早く並ぼうぜ！！」

その場を後にしようとした俺に向かって、いつの間に俺の傍から移動して列に並んだのか、キルアは手を振りながら大きな声で俺の名を呼んだ。

「……」

何故俺みたいな子供に興味を持ったんだか知らないけど、キルアにしっかりロックオンされてるみたいです俺。

あ、子供だからか……？

周りを見渡しても、俺達みたいな年齢の人間なんて誰も居ない。

普通の子供であればこんな場所に用なんて無いのだから、俺やキ

ルアみたいな人間はどうしたって目立つ。

そして、屈強な男達の群れの中で、その子供の一人である俺が叫び声を上げていれば、俺がキルアの眼に留まるのも興味を持つのも当然なのかもしれない。

「ラスク！早くこいて！早くしないとオレの後ろに誰か並んじやうじゃん！」

とにかく、ああして俺を呼ぶキルアを無視して帰るなんて事は、俺には無理。

「リョーカイシマシタ……」

しょうがない……、帰るのは諦めよう。

イルミに殺される前に逃げることでぐらいいは出来るだろう……多分。

キルアは余程家族以外の人間と話すのが楽しいのか、後ろに並んだ俺にひっきりなしに色々な質問をぶつけてきた。

やはり、ココにいる人間の中で唯一、俺もキルアと同じ子供であ

った事が彼の興味を引いたようだ。

俺にとってもキルアとおしゃべりはとても楽しいモノだったので、あれやこれやと他愛のない質問にちゃんと答えた。

自分たちの家族の事についても色々と2人で話しをしあった。

どうやら既にキルアは自分の境遇や家族に相当うんざりしているようで、話している途中殺気を漏らしまくるキルアを宥めるのに結構な苦勞をした。

俺が育ての親達の話や、一緒に世界を旅した事を話すと、キルアは凄くうらやましそうだった。

聞いた所によると、どうやらキルアの兄であるイルミは『仕事』で出掛たらしく、1ヶ月は帰ってこないそうだ。

その隙を突いて？シルバは、反対する母親を押し切ってキルアをココに放り込んだらしいのだ。

普通の6歳児ならば、自分の父親にどんな所かも知らない場所に連れてこられたら嫌がりそうなものなのに、キルアはむしろ嬉しうだった。

『1ヶ月兄貴は帰ってこない』コレを聞いた時は本当に……、本当に安堵した。

とにかく1ヶ月の身の安全は約束されたようなモノだ。

この天空闘技場で貯める賞金の目標金額は、なんとなくG・Iの定価と同じ金額に決めて58億ジェニー。。

流石に1ヶ月で目標金額を達成できるとは思っていない。

1ヶ月経ったら……、シルバやゼノがイルミを引き留めるのを期待しよう……。

今キルアと別れて家に帰るという気持ちは無くなってしまった。

「お、そろそろ俺達の番だよキルア」

「まったく、やっとかよ」

行列に並んでから、既に約2時間が経っている。

あつという間だったがようやくこれで登録ができる。

「お待たせ致しました！天空闘技場へようこそ！まずは、こちらの申し込み用紙に必要事項をお書き下さい」

「どうも」

俺とキルアは受付のお姉さんから申し込み用紙を受け取り、すぐ傍にある記入台へ移動した。

「えーと、ナニナニ？『名前』、『生年月日』、『闘技場経験』、『格闘技歴』、『格闘スタイル』か。生年月日か……どうしようかな」

「なに？ラスクって、自分の生年月日もわかんねーの？」

「いやーさっきも言ったけど俺って捨て子だったから、生年月日って不明なんだよね」

「ふーん」

「まあ、拾って貰った日でいっか。……1982年、1月の、24日って」

闘技場経験は、無し。格闘技歴は……、7年だったけ？

格闘スタイルは、心源流拳法。

よし、コレでオーケー。後はこれを提出すれば登録完了だ。

「俺は出来たぞ。キルアは？」

「んー、オレの格闘スタイルってなんだろう？ゾルディック流暗殺

術？」

「……まあ、それでいいんじゃない？？」

「だよなー、これ以外ねーし。——……よし、出来た！」

俺とキルアが申込用紙を受付のお姉さんに渡すと、お姉さんはざっと書類に目を通し、天空闘技場のルールや施設についての説明をしてくれた。

キルアの格闘スタイルに書かれている文字にも動揺せずに、受け付けを済ませたお姉さんは偉い。

多少口元は引きつっていたが、笑顔を絶やさないそのプロ根性に拍手。

恐怖に負けずよく頑張った！感動したっ！

「よーし、これで登録完了だな！俺は早速試合しに行こうと思うけど、キルアはどうする？」

「オレも行く。オヤジのやつマジで無一文で放り込みやがったから、このままじゃチョコロボ君買えねーし」

「よっしゃー！じゃあ行くとするか！」

そうして俺とキルアは連れだって、1階にある闘技場へと向かった。

なんだかオラ、ワクワクしてきたぞ！

俺が何処まで強くなったのか、それをやっと確かめることができる。

今まで、育ての親達と組み手をしたときは、もれなく俺ボコボコ相手無傷だったからな。

大人げないったらありやしない。

俺と当たる人は可哀想だけど、1戦目はちよつと本気で行かせて貰う！

いままでの鬱憤を晴らすために！

楽しみだな……、ぐふふふ……。

第8話（後書き）

・チョコロボ君　：　キルアの大好物のお菓子。

一体どんなお菓子なんでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5351z/>

転生者のハンターライフ【習作】

2011年12月24日01時29分発行